

ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント 「映画はどこで、どのように保存されているのか 日/米ナショナル・フィルム・ アーカイブからの報告」講演採録①

フィルムセンター相模原分館・映画保存棟Ⅱについて

とちぎ あきら
Akira Tochigi

連載：

フィルム・アーカイブ
の諸問題
第80回

フィルムセンターでは、ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」(10月27日)を記念する恒例の特別イベントを、「映画はどこで、どのように保存されているのか 日/米ナショナル・フィルム・アーカイブからの報告」と題し、2011年11月5日に大ホールで開催した。本イベントでは、2011年3月フィルムセンター相模原分館に新設された映画保存棟Ⅱと、米議会図書館映画放送録音物部が2007年に開設した国立視聴覚保管センター(「パッカード・キャンパス」)の話題を中心に、とちぎあきら(フィルムセンター主任研究員)とパトリック・ロックニー氏(「パッカード・キャンパス」ディレクター)による各施設と保存活動の報告、また映画保存の現状と今後の課題をめぐるロックニー氏と岡島尚志(フィルムセンター主幹)による対談、議会図書館が所蔵する映画コレクションの上映が行われた。本誌では、上記二つの報告と対談を再録し今後3号にわけて掲載する。なお、イベント当日の進行と上映作品については、101号の「トピック」欄を参照いただきたい。

本日は行楽日和のさなか、フィルムセンターまで足を運んでいただき、まことにありがとうございます。近年、多くの方からフィルムセンター相模原分館を見学したいというご希望をいただくようになりました。これは昨今のアーカイブへの関心の高まりから、映画フィルムおよび関連資料を保管している現場、また格納のための検査をしている現場を見たいと思われる方が増えているからでは、と感じておりますし、当方としてもできるだけそのようなご希望にお応えしたいと思っています。実際に、映

画の研究や教育に関わっていらっしゃる方のみならず、広く映画業界やアーカイブに関係する方々や、倉庫業界の方々にもお越しいただいております。ただし、都心から往復で4時間かかりますし、通常は公開施設ではないために、日程が合わなかったり、こちらもご希望に添えない場合があったりします。そこで今日は、平成23(2011)年3月に竣工いたしました映画保存棟Ⅱの紹介をさせていただくことを中心に、相模原分館における映画フィルムおよび関連資料の保管状況とその背景についても、説明させていただければと思っております。加えまして、これからお話をいただくパトリック・ロックニーさんの講演や対談において盛り込まれるであろう、アメリカ連邦政府における映画保存の哲学やアイデア、ノウハウといったものを、日本における映画保存活動の将来に、有効に活かしていくために、フィルムセンターにおける現在の取り組みを参考事例として考えていただきたい、ということもごさいます。そのような観点から、相模原分館の映画保存棟の話させていただければと思っております。

相模原分館・映画保存棟Ⅱの概要

さて、このたび増築いたしました映画保存棟Ⅱですが、平成21(2009)年度の補正予算で建築し、平成23年3月30日に竣工いたしました[写真1]。建築面積1,090㎡、延面積4,927㎡、鉄筋コンクリート造で、地上2階、地下2階の建物になっています。主要部分は、映画フィルム保存庫とならして室が地下1階、地下2階にあり、保存庫は全部で20室。地上1階には、映画文献資料室(2室)、映画技術資



写真1

料室、映画フィルム検査室、映画フィルム仮置室、荷解場などあり、総工費約22億円の建造物です。

フィルムセンターにおける所蔵品の現況

ところで、現在フィルムセンターで所蔵している映画フィルムおよび関連資料は、以下のような数字になっています¹。

・所蔵映画フィルム本数	
日本映画	57,164本
外国映画	8,353本
計	65,517本
・所蔵映画関連資料数	
図書	36,179冊
シナリオ	約35,000冊
ポスター	約48,000枚
スチル写真	約643,000枚
技術資料(機械類)	約500点
映画パンフレット	約8,700点
映画館プログラム(みそのコレクション)	約15,000点
映画関連カレンダー	約630点

*他に、プレス資料、映画人資料、映画美術資料等がある。

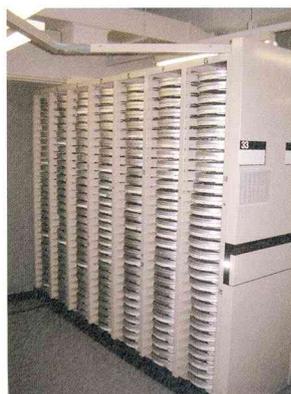


写真2



写真3



写真4

日本の映画保存は何に支えられているか

さて、日本において映画フィルムや関連資料の保存は、どのような根拠によって支えられているのか、ということですが、残念ながら現在、映画フィルム等の視聴覚媒体や映画関連資料に特化して、国の責任において保存を義務づけた法律は存在していません。ただし、フィルムセンターが東京国立近代美術館の一課としてあり、東京国立美術館が独立行政法人国立美術館を構成する一館であることを前提として、独立行政法人国立美術館法のなかには、美術館の目的として定められた、「美術(映画を含む。)にかんする作品その他の資料を収集し、保管して公衆の観覧に供するとともに、これに関連する調査及び研究並びに教育及び普及の事業等を行うことにより、芸術その他の文化の振興を図ること」(第1章第3条)という文言があり、ここに「映画」という言葉が盛り込まれています。また、昭和46(1971)年に改正された著作権法の施行令には、フィルムセンターを記録保存所という呼称で示しつつ、「その保存する一時的固定物(録音物及び録画物)を良好な状態で保存するため、適当な措置を講じなければならない」(第4条第2項)という文言があります。

また、こうした法律とは別に、文化財保護法が存在しますが、そこでも映画を明記した文言はありません。しかし、近代の文化遺産保護という動きのなかで、映画フィルムも有形文化財(美術工芸品)の歴史資料として、重要文化財に指定していくという流れが、この3年の間に出来上がってきました。現在までに、以下の3件(全4本)の映画フィルムが重要文化財に指定されています。

- ・平成21(2009)年 『紅葉狩』(1899年、柴田常吉撮影、日活株式会社旧蔵)可燃性デュープ・ネガ
- ・平成22(2010)年 『史劇 楠公訣別』(1921年、日活株式会社旧蔵)可燃性オリジナル・ネガ
- ・平成23(2011)年 『小林富次郎葬儀』(1910年、吉澤商店撮影、ライオン株式会社旧蔵)可燃性オリジナル・ネガ及び可燃性上映用ポジ

日本映画はどのくらい残っているのか

一方、映画保存を進めるうえで、映画フィルムがいったいどのくらい残っているのかということも、また常に議論になってきます。フィルムセンター以外にも映画フィルムを所蔵しているところがありますし、それがまだ多く存在していることを願っていますが、あくまでフィルムセンターにおける所蔵フィルムの本数を前提に、日本劇映画の残存率を計算してみました。いくつかの信頼できる文献資料を基に算出した

数字として、1910年から2009年までに公開された日本劇映画の総数34,043作品に対し、フィルムセンターの所蔵作品数は5,559作品で、全体の16.3%にあたります²。このうち、1940年代までの収集率を年代別に挙げてみると、以下のような数字になっています。

・1910年代	0.2%
・1920年代	3.8%
・1930年代	10.7%
・1940年代	29.8%

以上のような日本映画の残存率、とりわけ戦前の残存率の極端な低さということが、日本における映画保存の前提となっており、このような状況のなかで、どのように映画保存を進めていくべきかが問われているわけです。フィルムが残されていることは願ってもないことですが、フィルムがなければ、それに関連する資料を、たとえ断片でも多く収集することによって、私たちにとって失われた歴史を取り戻すことが必要ですし、そのことが日本におけるフィルム・アーカイブ活動の芯になるのではないかと思います。

相模原分館のある場所

フィルムセンター相模原分館がある地域には、戦前に相模原軍都計画というものがありまして、現在分館が置かれている場所には、昭和18(1943)年から、陸軍機甲整備学校がありました³。終戦後、占領期にアメリカ陸軍の兵舎であるキャンプ淵野辺になったわけですが、昭和49(1974)年に米軍より国に返還された後、このキャンプ淵野辺の跡地を利用する一環として、昭和61(1986)年1月、約15,000㎡の敷地に東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館が竣工した、という経緯になります。戦前の軍都計画のもと、近隣には軍事施設が点在していたわけですが、陸軍機甲整備学校は横浜線淵野辺駅に近いところにあり、学校の敷地内に兵舎が並んでいたのですが、この敷地がその後キャンプ淵野辺として利用されたと言われています⁴。



写真5

映画保存棟Iの概要

昭和61年に竣工しました映画保存棟Iは現在、既存棟とも呼んでおりますが、建築面積が1,504㎡、延面積は4,510㎡、新しい保存棟と同じく、地下2階、地上2階で、保存庫に加えて映写ホールや映画フィルム検査室などがあり、横に長い建物になっています。保存庫は地下に置かれ、総工費は約15億円でした。保存庫の収納能力は、地下2層合わせて、約220,000缶。収納棚は、一部物品棚を設置した部屋もありますが、ほとんどが電動式の移動棚で、一連30段、一段一段フィルム缶を分けて収納するようになっています[写真2]。収納率は80%まで達しました⁵。収納数がここ10年間で倍増したことを受けて、新しい保管施設を作ることが喫緊の課題となっていたわけです。温湿度環境は、地下2階が5°C±2°C、40%±5%、地下1階が10°C±2°C、40%±5%。ただし、一室だけピネガーシンドロームを過度に発症しているフィルムを専用に保管する保存庫として後年改造をいたしまして、2°C±2°C、35%±5%で保管しております。

映画保存棟IIのポイント

①より多くの映画フィルムを、よりよい環境で

それでは、これから新しい保存棟、映画保存棟IIのポイントをいくつか説明していきたいと思います。これまで以上に多くの映画フィルムを、よりよい環境で保管することを目的に、全体で20部屋、266,000缶の収納能力を持つ施設になりました。収納棚は、保存棟Iと同様に、電動式の移動棚なのですが、一連を40段と高くし、1,000ft缶から2,000ft缶までのサイズの異なる缶をどれでも納められるような棚受けを設けています[写真3、4]。棚受けに2段の凹みを作ることによって、揺れても缶が落下しないような工夫を凝らしています。各室とも、温度は2°Cから10°C±2°C、相対湿度は35%±5%という設定が可能になっています。また、映画フィルム保存庫のみならず、ならし室、検査室、仮置室にも、酢酸除去のための化学吸着フィルターを装備して、ピネガーシンドロームの進行を抑制するとともに、作業

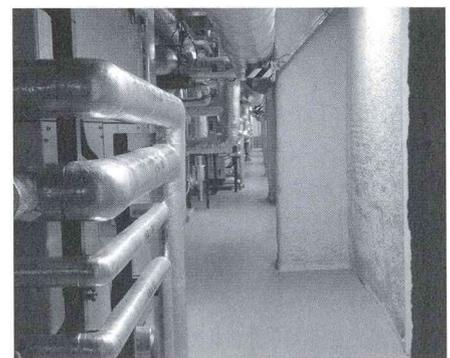


写真6

中のスタッフへの影響を少なくするための措置が施されています。よりよい環境での保管に関連しまして、ならし室、エレベーターホール、前室、風除室など、外気の流入を防ぐためのバッファゾーンを重層的に設置し、結露の防止に努めています。既存棟と新規棟をつなぐ通路部分の天井には、いくつも小窓が用意されておりますが、これらの窓は映画フィルムのさまざまな画郭を表現しており、これらが写し出す影が通路に反射しています。映画保存棟Ⅱはそこを訪れる人たちに、映画フィルムというモノの存在を意識させるような仕掛けを、玄関部分から施しているわけです。沓脱に当たる場所が風除室となり、ここから正面奥の大きなガラス窓を通して、相模原分館の敷地に隣接する、キャンプ淵野辺跡に残る留保地の林が見える構造になっています。ここを右に曲がりますと、エレベーターホールにつながっていきます。向かいには、荷捌き・仮置室、検査室が並んでいます。

②より安全で安定した収蔵環境を

加えて、映画保存棟Ⅱでは、これまで以上に安全で安定した収蔵環境を作る工夫も凝らしています。保存庫内では、ソックフィルターと呼ばれる給気装置を用い、緩やかな風速で、庫内をより均質に冷気が行き渡るような仕組みを設けています。ソックフィルターとは言葉どおり、ソックス型の長い筒状のフィルターで、そのなかを通る冷気がじんわりと外に漏れ出すような仕掛けになっています[写真5]。建屋は地下2層ですが、その周りにピットと呼ばれる空気層を設けており、そこで地熱を利用した予冷・予熱を行ったうえで、導入外気の一部を取り込むことになります[写真6]。そうすることで、空調エネルギーの低減をもたらすエコロジー対策になるわけです。また、保存庫の外側に空調機械室を設けることによって、機械室自体を緩衝スペースとして利用することにより、躯体外の防水と併せて重層的な空気層を作り、庫内環境の安定を図っています。消火は窒素ガスを用いて行います[写真7]。地上2階に、空調機械室、電気室などとともに、窒素ガスのボンベ室が設けられています。ボン



写真7

ベ室には、部屋ごとの火災や鎮火状況を監視するモニターが設置されています。

③映画関連資料も長期保管できる体制に

さて、今回の保存棟では、映画フィルムだけでなく、映画関連資料も長期保管できるような体制を整えました。文献資料について2室、技術資料、すなわち撮影機や映写機など機械類を中心とした資料を1室、温度21°C ± 2°C、相対湿度50% ± 5%で保管ができるようになりました[写真8]。それぞれの部屋では、ソックフィルターによる給気を実施しておりますし、内部の壁及び床には神奈川県産の木材を使用し、地産地消に貢献しています。これらの部屋には、1階のエレベーターホールから、金庫扉を通じて入ることになります。

④作業導線の徹底とバリアフリー化

ところで、保管するフィルムや資料の量が増えれば増えるほど、それに伴う作業が増加してきていることから、作業導線をきちんと整えることと、作業を行うスタッフの年齢を考えたバリアフリー化を行うことが必要でした。そこで、まずは、搬入物をできるだけ直線的に移動させられるような構造を考えました。トラックが入る荷解場で、リフターを用いて荷物を下し、仮置室で荷捌きをしたあとで検査室に入る。エレベーターはこれまで大変小さかったのですが、今回は専用台車が3台入るスペースを確保し、エレベーターが指定の階に止まると、台車は前室に直結した50mの広さがあるならし室に入ることになります。また、保存庫など各室の扉をすべて引き戸にし、ハンドルにより扉の開閉を楽にするとともに、閉めた際に扉が床にストンと落ち込むような仕掛けになっており、これにより気密性を高めるとともに、フラットな歩踏を実現することができました[写真9]。かつ、台車がスムーズに切り回しできるように、扉幅は1.2メートル以上を確保しています。

⑤セキュリティの重視とエコロジー対策

セキュリティは、建物全体、映画フィルム保存庫及び資料室を、3つのセキュリティ区画に分けています。機械警備、ITVカメラによる監視とともに、建物入口、保存庫、資料室への



写真8

出入りについては、カードキーとシリンダー錠を併用することにしてあります。エコロジー対策としては、先ほどのピットの利用に加えて、太陽光発電パネルを設置するとともに、風力発電により敷地内の外灯に電力の供給を行っています。また、法定時間以上の自家発電に対応できるような設備も設けています。

⑥映画フィルムと映画文化を顕彰するデザイン

デザインについては、この施設が映画フィルムを保管している場所であるということ、また映画文化を顕彰するための場所であるということ、来ていただく方に意識してもらえるようなデザインを採用いたしました。外構デザインとしては、緑に囲まれたロケーションであることを重視するとともに、映画フィルムや資料を長く保管する施設という安定感が伝わるような重量感を備えたものになっています。また、既存棟との間の中庭部分には、映画フィルムの形状を思わせるデザインを用いています。外観デザインとしては、既存棟の白と対比させた黒をベースとするモノトーンの色調を用いています[写真10]。壁には、フィルム幅を意識した多治見産のレンガを積み、スリット窓や連絡通路の小窓にも、フィルムの画郭を意識させるような工夫が施されています。

内装デザインは、「光と影」や「モノクロとカラー」といった映画には欠かせない概念を、常に意識してもらうよう、随所に工夫を凝らしています。玄関部には、映画フィルムとして初めて重要文化財に指定された『紅葉狩』の35mmプリント全篇をガラス板に嵌め込み、すべてのコマが見られるようにしました[写真11]。多くの人にとって、映画フィルムをじかに見ることがもはやなくなってしまった時代であるからこそ、映画とはこのようにコマが並んでいるものが連続的に映写され、一つの作品として体験されるものなのだ、ということ意識してもらえるような展示になっているわけです。また、休憩スペースの壁面にも、最初期のアニメーション映画である『なまくら刀』(1917年、幸内純一)と『浦島太郎』(1918年、北山清太郎)のフィルムの一部を、ガラス窓に嵌め込んでいます。内壁には、場所によってステンレス

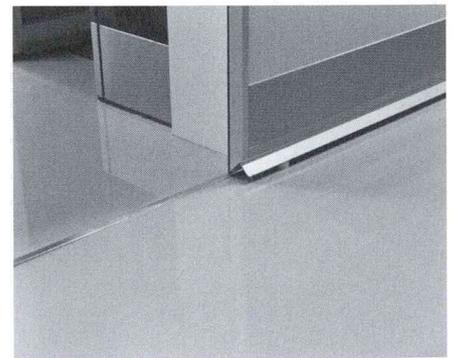


写真9

や木を用いているのですが、荷解場となっているトラックバスの入り口にある打ち放しのコンクリート面には、映画ポスターを転写するという試みを行いました。尾上松之助主演の『岩見重太郎』(1917年)、栗島すみ子主演の『真珠夫人』(1927年)です。トラックがこの建屋に入ってくると、片や日本最古の映画スターが、片や日本の映画女優の草分けが、来館を出迎えてくれるという仕掛けになっているわけですね。また、地上1階、地下1階、地下2階の各階の基本となる色を、赤(R)、緑(G)、青(B)の三原色に分けています[写真12]。各部屋番号を示すサインもすべて、このような色分けになっています。

映画保存の未来へ

最後に、映画保存の未来ということですが、映画をフィルムで残し続けるには、まだまだ課題があると考えています。保管施設に特化した場合、たとえば可燃性フィルムを今よりも安全で安定した環境で保管するにはどうしたらいいのでしょうか⁸。また、アーカイブを単に保管だけではなく、収集から保存・復元、上映

に至る一連のプロセスと考えた場合、それぞれのインフラの確保と整備を図るために、アーカイブはどのようなことをしていけばいいのでしょうか。このような問題に常に直面しています。また、フィルムではなく、デジタルデータの保管については、どうでしょうか。記録媒体としての寿命が短く、システムが陳腐化するスピードも大変速い。こうした現実を前にして、デジタルの視聴覚情報の保存をどのように進めたいのでしょうか。映画をフィルムとして持ち続けるとともに、デジタル情報の保存と共存させていくハイブリッドな視聴覚アーカイブは、どうしたら可能なのでしょうか。このような課題は、映画保存の未来におけるある一面に過ぎないかもしれませんが、いまだ残された大きなテーマとしてあるように思います。このような課題について、これから講演と対談をしていただくパトリック・ロックニーさんより、何か有益な示唆をいただけるのではないかと期待しながら、パトリックさんにマイクをお渡ししたいと思います。ご清聴ありがとうございます。■ (フィルムセンター主任研究員)



写真10



写真11



写真12

註

- 1 以下の数字は、平成24(2012)年3月末日現在。
- 2 日本劇映画の製作本数は、1910年から1930年までの作品については『キネマ旬報別冊 日本映画作品大鑑 1集』(1960年、キネマ旬報社)、『キネマ旬報別冊 日本映画作品大鑑 4』(1960年、キネマ旬報社)、『キネマ旬報別冊 日本映画作品大鑑5』(1961年、キネマ旬報社)、1931年から1944年までの作品については『日本劇映画作品目録 自昭和六年至昭和廿年八月』(1945年、社団法人映畫公社・製作局)、1945年以降の作品については『映画年鑑』(時事映画通信社)に準拠した。
- 3 『相模原市史 第四巻』(1971年、相模原市)、『相模原軍都計画と地域変化』(1992年、相模原市教育委員会)を参照した。
- 4 昭和20(1945)年9月2日、調達要求書4419号により、占領軍が陸軍機甲整備学校を接収、米陸軍の兵舎地区とした。なお、学校の敷地に隣接していた訓練場は、終戦後農林省所管となり、農地として払い下げられた。キャンプ淵野辺には、昭和25(1950)年頃より、通信受信設備を持つ基地として、米国防省直轄の「国家安全保障局在日太平洋事務所」が置かれたが、昭和40(1965)年7月に米軍が受信障害を防ぐために、周辺地域一体の建築制限と金属製品の使用制限を求めてきたことから、地域住民による反対運動が発生。その後の在日米軍基地の集約統合と相まって、早期返還へと運動は転化し、昭和49(1974)年11月30日にキャンプ淵野辺は米軍より日本政府に返還された(『相模原の基地 特集 よみがえるキャンプ淵野辺』1982年、相模原市、及び上掲『相模原市史 第四巻』『相模原軍都計画と地域変化』を参照した)。
- 5 数字は、平成24(2012)年5月10日現在。
- 6 ソックフィルターとは、難燃糸による布製ダクトを通して、ほぼ無風状態(0.1～0.3m/sec)による冷気の吹き出しを可能にした空調方式。
- 7 地下2階の床下及び既存棟との間の中庭部分にあたる地下下に設けられたビットで予冷・予熱された外気が、外周ビットを通じて保存庫内に給気される。また、躯体外防水、コンクリート躯体、断熱材、ビットなどによる6面6層の魔法瓶構造により、気密性、防水防湿性を高めている。
- 8 可燃性フィルム(硝酸繊維素をベースに使用したフィルム)は、日本においては消防法で危険物第五類に分類されており、10キログラム以内であれば、地元の消防署に届け出ることによって保管することが可能だが、それを超える場合は、法に定められた条件を満たした建屋での保管が義務づけられている。フィルムセンターでは、所蔵する可燃性フィルムのほとんどを千葉県市原市の民間倉庫に預けているが、重要文化財に指定されたフィルムに限り、相模原分館の保存棟IIにおいて保管している。



東京国立近代美術館フィルムセンターは、国際フィルム・アーカイブ連盟(FIAF)の正会員です。FIAFは文化遺産として、また、歴史資料としての映画フィルムを、破壊・散逸から救済し保存しようとする世界の諸機関を結びつけている国際団体です。

National Film Center (NFC) of The National Museum of Modern Art, Tokyo is a full member of the International Federation of Film Archives (FIAF). The Federation brings together institutions dedicated to the rescue and preservation of films, both as elements of cultural heritage and as historical documents.

東京国立近代美術館ホームページ

<http://www.momat.go.jp/>



フィルムセンター携帯電話用
ホームページ
<http://www.momat.go.jp/nfc/k/>

お問い合わせハローダイヤル

☎03-5777-8600

「NFCニューズレター」第103号
(2012年6月-7月号/隔月刊)

発行・著作:

独立行政法人 国立美術館/東京国立近代美術館©

編集:

東京国立近代美術館フィルムセンター

〒104-0031 東京都中央区京橋3-7-6

☎03(3561)0823

制作:

印象社

発行日:

2012年6月1日

*無断転載を禁じます。

NFC NEWSLETTER

Bimonthly

(Volume XVIII No. 2 June - July 2012)

Published and Copyrighted by

The National Museum of Modern Art, Tokyo ©
(Independent Administrative Institution National Museum of Art)

Edited by

National Film Center

(The National Museum of Modern Art, Tokyo)

Addr.: 3-7-6 Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Tel.: 03(3561)0823

Designed and Produced by

Insho-sha

Date of Publication:

June 1, 2012

*No part of this publication may be reproduced or

reprinted without the approval of the publisher.